家庭内言語接触とエンレジスターメント

ー在北京日中国際結婚家庭を事例にー

小幡佳菜絵 (Tsinghua University 大学院生)

1. 研究背景・目的

国際間移動の活発化を背景に，多言語・多文化を特徴とする家族（以下，多言語・多文化家庭）が増加している (Lanza & Curdt-Christiansen, 2018; Lanza & Li Wei, 2016; Li Wei, 2012). 日中国際結婚家庭も，そのひとつと言えるだろう. このような多言語・多文化家庭の，家庭ドメインにおける言語使用・管理を研究対象とする Family Language Policy 研究は，King *et al*. (2008) などを中心に，2000 年代後半から学際的に発展してきた. 近年の動向として，国際結婚家庭における複数言語の実践を対象とする研究は増えつつあるものの (Danjo, 2021; Hiratsuka & Pennycook, 2020)，日中国際結婚家庭における 3 種類以上の複数言語使用・管理に関する研究は，管見の限り未だ少ない. 日本国籍保有者（在日本）の国際結婚における配偶者構成では，中国国籍保有者が 1990 年代後半以降最も多く占めること（日本政府統計，2019）などから，日中国際結婚家庭における，日本語・中国語（普通话）を含む多言語使用・管理に関する研究は，今後より求められると考えられる. そこで，本研究では，以下のリサーチ・クエスチョンに関し，在北京日中国際結婚家庭一組の日本人母親による語り・手記を，ライフ・ヒストリー研究法にもとづき探索的に分析した：(1) 家庭ドメインにおける，言語使用は経時的にどのように管理されてきたか. (2) 両親の母語が異なるという家庭内言語接触の環境において，母親の視点から，子どもたちのどのような言語実践が経時的に観察されてきたか. (3) 中国国内での移住は，家庭内言語実践にどのような影響をもたらしたか. その際，とりわけ，2 点目の問いに関しては，Agha (2003; 2005; 2007) により提起された，「エンレジスターメント / レジスター化 (enregisterment)」の概念に理論的に拠りつつ，分析を試みた.

2. エンレジスターメント (enregisterment)

Agha (2003) に拠れば，エンレジスターメントとは，「ある言語レパートリーが，当該コミュニティの成員によって，レジスターとして認識されるようになる過程」を意味する (p. 231). レジスターとは，「当該文化において，その使用により，特定の社会的実践やその参与者像 (characterological figures) が，ステレオタイプ的に指標される言語レパートリー」を指す (Agha, 1999: 216). 本研究では，日中国際結婚家庭という家庭レベルのコミュニティに着目し，日本語・標準中国語（以下，普通话）・広東語（以下，广东话）が接触することにより，どのような言語管理が目指され，その結果，どのような家庭内レジスターが構築（エンレジスター / レジスター化）されたか，を経時的な視点から検討していく. Agha (2003; 2005; 2007) に拠れば，エンレジスターメントを検討する際，主に以下の 3 つの観点が重要であると指摘されている：(1) 第一に，言語レパートリーの特徴である. ここには例えば，どの程度の数の言語レパートリーが当該レジスターとして該当するか，どのような言語・非言語的記号が，当該レジスターと共起しうるか，などが含まれる. (2) 第二に，当該レジスターの社会的指標性（social indexicality）である. 上述の定義にもとづけば，ある言語レパートリーがレジスターとして，コミュニティの成員によって認識されるとき，そこにはそれを使用する話者像や，話者間の関係性・役割，使用実践の場に関する，話者間で共有されたステレオタイプ的理解がある. このステレオタイプ的理解こそが，レジスターの指標性（つまり，レジスター使用による語用論的効果）を担保する. (3) 第三に，当該レジスターを認識・使用可能な話者の範囲である. 特定のレジスターの運用能力 (register competence) は，社会化・獲得過程へのアクセスの違いから，社会において画一的に共有されているわけではない. そのため，運用能力そのものが，その実践を介して話者間で知覚され，話者のアイデンティティを表象する機能を持ちうる. ここで，もうひとつ重要な点が，これら 3 つの側面（言語レパートリーの特徴；社会的指標性；認識・使用可能な話者の範囲）は，レジスターに関する解釈や語り・再帰的使用といった，メタ・ディスコースを介して，経時的に変化する，という点である. このように，レジスターは，歴史的産物としての特徴を有している. この点が，研究方法としてライフ・ヒストリー研究法が適切と考えた理由のひとつである.

3. 研究方法

3.1 ライフ・ヒストリー研究法

本研究で採用したライフ・ヒストリー研究法は，個人や組織により解釈・提示された，経験や出来事をその研究対象とする (Denzin, 1978: 215). この研究法では，当事者による自伝的語り・インタビュー・手記などにもとづき (Bertaux & Kohli, 1984: 216-217)，当事者の経験・生涯の再構成・多角的検討が目指される. 本研究でこの研究法を採用した理由は，主に次の 2 点である：(1) 第一に，中国というフィールドにおいては，社会的にマイノリティに位置する日中国際結婚家庭を対象とするためである. このような社会的マイノリティの層を対象とする場合，アクセス可能な先行研究や公的な資料・史料は限定的である. そのため，当事者の視点・解釈を起点に，探索的に研究を遂行することを可能にするライフ・ヒストーリー研究法が適切と考えた. (2) 第二に，2 節で指摘したように，レジスターは，社会・歴史的過程の産物として特徴づけられるためである. 後述するように，本研究では，研究対象である一家が中国広州に渡った 1995 年から現在に至る，およそ 27 年という長期間にわたる言語使用・管理や，エンレジスターメントの過程を分析の対象としている. これらの点から，ライフ・ヒストリー研究法が最適と考えた.

3.2 研究対象

本研究で対象とする日中国際結婚家庭は，日本国籍の母親・中国国籍（広東人）の父親・3 名の日本国籍の子ども（長男 26 歳・長女 25 歳・次女 22 歳）の 5 名で構成されている. 本研究では，この家庭の日本人母親（仮名:N さん）の語り・手記をもとに分析が進められた. N さんと筆者は，北京在住の日中国際結婚をした日本人女性で構成される，現地コミュニティを介して 2021 年 4 月に知り合った. N さん一家は，1995 年に日本から中国広州に渡ったのち，子どもたちの高校進学に合わせ，北京への移住を経験している. 子ども 3 名は，全員中国ローカルの学校（広州の小・中学校，北京の高校）を選択している.

3.3 データ収集・分析手続き

データは，2021 年 7 月から 12 月に実施された，20 分から 2 時間にわたる計 3 回の半構造化インタビューと，家庭での言語実践に関する N さん自身の手記から収集した. インタビュー・データは，本人の承諾を得たうえで録音された. 収集されたデータは，筆者により書き起こされ，以下の手順で分析された：(1) 発話データが示す意味内容に応じ，一文または内容ごとに切片化した；(2) リサーチ・クエスチョンにもとづき，各切片の内容を適切に示すラベルを作成した；(3) 内容が共通するラベルを統合しカテゴリー化した. これら 3 つの段階を繰り返し，カテゴリーを洗練化させていった.

4. 結果・考察

4.1 家庭ドメインにおける，言語管理の変遷

N さんの家庭では当初，「原則的には」一親一言語（OPOL; One Parent-One Language）の戦略が選択されていた. つまり，N さんと子どもの間では日本語，中国国籍の父親と子どもたちの間では广东话を，原則的には使用する方針が採られていたという. しかし，子どもにとって，家庭外のドメイン（主に保育園・学校などの教育ドメイン）で使用される言語は主に广东话（+普通话）である. このことから，広州という言語市場 (Bourdieu, 1977; 1991) に影響を受け，以下の発話データ1にみられるように，日本語・广东话・普通话が混用される，「ミックス語」を容認する方向に変化していったという.

> 発話データ1 (2002-06-14 手記) ：
> 私も初めのうちは子供が「ミックス語」を話すと，同じ意味のことを日本語と広東語で正しく言い直させていた.
> しかし，それもいつからかやめてしまった. コミュニケーションの原点である「通じればいい」に戻ってしまったのだ.

では，具体的に，「ミックス語」を含むどのような言語実践が，家庭内で観察されたのだろうか. 以下 4.2 節で検討したい.

4.2 家庭内言語接触とエンレジスターメント

N さんによると，子どもの言語運用能力は，日常会話に関して言えば，概して，广东话，日本語，普通话の順に位置づけられるという. このとき，以下の 2 種類の言語レパートリーが，N さんの家庭で再帰的に実践され，「我が家独特の言語」（2004-6-14 手記），「家の中では通じることば」（2021-09-03-19’22-19’25 インタビュー・データ）というメタ言語的ラベルを伴い，レジスター化されていったという. (1) 第一に，ある言語（多くの場合，日本語）では知らない語彙や句を，もうひとつ別の言語で知っている語彙で代替的に表現

する, Code-mixing である. N さんの子どもたちの場合, 母親と会話する際, 日本語の統語構造を保持しつつ, 一部の単語を广东话で表現する方法が, 幼少期から現在に至るまで多く観察されたという. 収集された事例の一部を以下, 表1に示す.

表1: 日本語と广东话で構成される Code-mixing の事例

観察された Code-mixing	日本語訳
この朱古力を, テレビの上に放して.	このチョコレートを, テレビの上に置いておいて.
ママ, 今日は星期幾なの？	ママ, 今日は何曜日なの？
あのお花, 好靓だね.	あのお花, きれいだね.

註: 下線部分が广东话での発話箇所.

(2) 次に, 日本語で知らない単語に関して, 广东话や普通话の既知表現をもとに, 子どもが誤って推論した誤用表現の再帰的使用である. 例えば, 次の発話データ 2 に示される, 長男の「无聊(つまらない)」の誤用表現が挙げられる.

> 発話データ 2 (2021-09-03-18'27-19'03) :
> あの, 中国語の「无聊」, 「つまらない」の「无聊」が, うちの息子は, 「あー, ムリョウだな」って言ったことがあって […]. 逆に今度単語を知るようになってくると, 漢字の単語は日本語に結構あるって意識するじゃないですか. そうすると, 大体が, あの, 読み方を変えれば, あの, 音読みにすればできるんじゃない, みたいに思うんですよね, きっと.

この発話データ 2 では, 日本語の「つまらない」という単語に関し, 普通话の対応語彙である「无聊」を, 「日本語の音韻体系に則して発音することで表現できる」と長男が誤って推論した, 誤用表現が観察されている. この誤用表現は, 次の発話データ 3 に示されるように, 家族の他の成員が再帰的に使用することによって, レジスター化したことがうかがえる.

> 発話データ 3 (2021-09-03-19'15-19'25) :
> だからわざと, 今度, つまらないときには, 「すごいムリョウだね, 今日」とかいう, そういう, 家の中では通じる言葉みたいな, 結構あるんですよ.

ここでは, 日本語母語話者である N さんが, 日本語の統語構造を持つ文のなかで「わざと」, この誤用表現を再帰的に使用することで, 日本語と当該誤用表現が対照的に認識され, ユーモアとしての語用論的効果が生み出されている. 同時に, 家庭内レジスターとして, この誤用表現が実際に使用された発話状況(つまり, 長男が誤用した発話場面)が指標されることで, 指標された発話状況を共有する家族の成員としてのメンバーシップが喚起され, 社会的距離の近さ(親しみ)や, 家族の一員としてのアイデンティティを表象する語用論的効果も生み出されていると考えられる.

4.3 広州から北京への移住がもたらした家庭内言語実践への影響

4.2 節で示したように, N さんの家庭では, 广东话・日本語・普通话という 3 種類の言語の接触を特徴とした, 一連のレジスターが観察された. このような N さんの家庭における言語実践に対して, 広州から北京への移住は, どのような変化をもたらしたのだろうか. 発話データ 4 に, N さんによって観察された変化が示されている.

> 発話データ 4 (2021-09-03-10'19-10'38) :
> わたし気がついたんですけど, こちら(北京)に来てから, 普通語で話すこともあります. 前はずっと, 絶対, 普通語で話すということはなかったんですけど, こっち(北京)に来てから, 娘たち 2 人が普通語で喋っているのも聞いているので. 必ず広東語でずっと話す, というのはなくなったみたい.

ここでは，広州に居住していた折は，全面的に广东话が使用されていた姉妹の会話に，普通话が浸透していることが観察されている．この変化は，広州から北京へという地理的移動に伴う言語市場の変化にしたがって，もたらされたものだと考えられる．つまり，北京への移住によって，家庭外のドメインにおいては，原則的に，普通话という正統言語(legitimate language)が高く評価され，主に使用される言語市場に変化した結果，普通话の使用が家庭ドメインにも浸透した，と考えられる．

5. 結論

本研究では，ライフ・ヒストリー研究法にもとづき，日本語・广东话・普通话の言語接触を特徴とする日中国際結婚家庭における，多言語実践・管理の経時的変化を，エンレジスターメントの概念に理論的に拠りつつ分析した．その結果，研究対象とした日中国際結婚家庭では，当初は OPOL の戦略を採用していたものの，居住地の言語市場の影響を受けつつ，家庭内言語接触により生じた 2 種類の家庭内レジスター(Code-mixing；誤用の再帰的使用)が創造的に使用されていることがわかった．以下，本研究の限界・今後の主な研究課題を 2 点示す：(1) 第一に，今回収集されたデータは，母親の視点から叙述されたデータに限定されている，という点である．より多角的に家庭内の多言語実践・管理を検討するためには，他の成員の視点，とりわけ子どもの視点が重要と考えられる．(2) 第二に，今回収集されたデータには，実際の言語実践・相互作用の場に関するデータが含まれていないことが挙げられる．当事者による叙述の場合，例えば，2 節で議論したエンレジスターメントの観点のうち，当該レジスターと共起可能な言語的・非言語的記号の側面が，当事者には意識的に捉えられていない可能性がある．本研究で得られたデータに加え，実際の相互作用・言語実践の観察から得られたデータを検討することで，より包括的な分析が可能となると考えられる．今後，これらの課題をふまえ，研究を進めていきたい．

参考文献

Agha, A. (1999). Register. *Journal of Linguistic Anthropology, 9*(1/2), 216-219. http://www.jstor.org/stable/43102470

Agha, A. (2003). The social life of cultural value. *Language & Communication, 23*(3/4), 231-273. https://doi.org/10.1016/S0271-5309(03)00012-0

Agha, A. (2005). Voice, footing, enregisterment. *Journal of Linguistic Anthropology, 15*(1), 38-59. https://doi.org/10.1525/jlin.2005.15.1.38

Agha, A. (2007). *Language and social relations*. Cambridge University Press.

Bertaux, D., & Kohli, M. (1984). The life story approach: A continental view. *Annual Review of Sociology, 10*, 215-237. http://www.jstor.org/stable/2083174

Bourdieu, P. (1977). The economics of linguistic exchanges. *Social Science Information, 16*(6), 645-668. https://doi.org/10.1177/053901847701600601

Bourdieu, P. (1991). *Language and symbolic power*. Polity Press.

Danjo, C. (2021). Making sense of family language policy: Japanese-English bilingual children's creative and strategic translingual practices. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism, 24*(2), 294-304. https://doi.org/10.1080/13670050.2018.1460302

Denzin, N. K. (1978). *The research act: A theoretical introduction to sociological methods* (2nd ed.). McGraw-Hill.

Hiratsuka, A., & Pennycook, A. (2020). Translingual family repertoires: 'no, Morci is itaiitai panzita, amor'. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 41*(9), 749-763. https://doi.org/10.1080/01434632.2019.1645145

King, K. A., Fogle, L., & Logan-Terry, A. (2008). Family language policy. *Language and Linguistics Compass, 2*(5), 907-922. https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2008.00076.x

Lanza, E., & Curdt-Christiansen, X. L. (2018). Multilingual families: Aspirations and challenges. *International Journal of Multilingualism, 15*(3), 231-232. https://doi.org/10.1080/14790718.2018.1477091

Lanza, E., & Li Wei. (2016). Multilingual encounters in transcultural families. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 37*(7), 653-654. https://doi.org/10.1080/01434632.2016.1151198

Li Wei. (2012). Language policy and practice in multilingual, transnational families and beyond. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 33*(1), 1-2. https://doi.org/10.1080/01434632.2011.638507

日本政府統計 (2019). 夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数・百分率 人口動態調査人口動態統計確定数婚姻